

松本市における日本語支援について

1 外国人児童生徒等に対する日本語教育

(1) 学校における支援員の配置

- ・ 松本市子ども日本語支援センターを設置（田川小学校内）し、特定非営利活動法人中信多文化共生ネットワークへ委託
- ・ 日本語支援が必要な児童・生徒に対して、学校からの依頼により日本語支援員及びバイリンガル支援員（母語による相談・カウンセリング・親とのコミュニケーション、お便りの翻訳等）を派遣。
- ・ 平成 24 年度は 7 か国 37 人、25 年度は 7 か国 37 人を支援（9 月 10 日現在）
- ・ 詳細は別添「子ども日本語支援センターだより」のとおり

(2) 担当教員に向けた研修

- ・ 市教育委員会としては行っていない。
- ・ 教育事務所での研修会において、子ども日本語支援センターの取組みについて紹介。日本語指導方法や学校生活におけるサポートについて研修

(3) 日本語能力の測定

- ・ 日本語習得評価基準を作成中。
- ・ 原級に戻す場面において一部を試行的に運用（特定非営利活動法人中信多文化共生ネットワークで作成）

(4) 課題

- ・ 日本語支援の範囲、子どもの状況に合わせた対応
- ・ 発達障害など特別支援との連携 ・ 人材の育成
- ・ 未就学児童への支援、保育園などとの連携 ・ 保護者への支援
- ・ 集中日本語教室の開設の検討とそれに伴う各学校での支援体制の構築

2 松本市の日本語教室

(1) 概要

- ・ 市内 10 か所で開催
- ・ 詳細は別添のとおり
- ・ 中央公民館の平成 25 年度予算 435 千円

(2) 地域の日本語教室の抱えている課題

- ・ 教室どうしの横の連携がないため、研修や人材育成など日本語支援に係る共通の課題が共有できない。
- ・ ボランティアの掘り起しやスキルアップなど人材の育成が間に合っていない。
- ・ 外国人の日本語ニーズとのギャップがある。
- ・ 初級への対応が難しい。
- ・ 地域への理解がなかなか進んでいない。

松本市内の公民館等で開催されている日本語教室(平成24年度実施状況)

◇ボランティアスタッフによる日本語教室

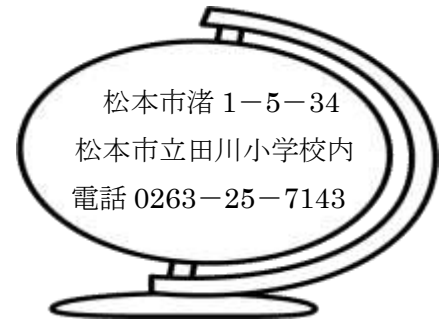
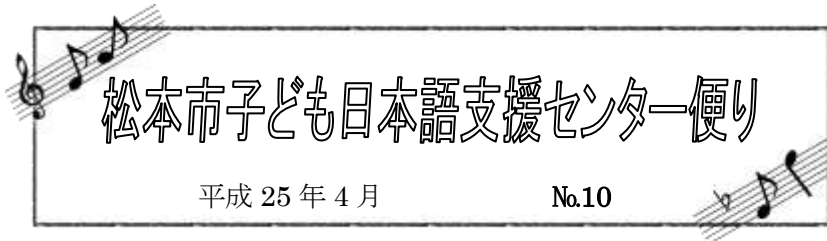
教室の名称	松本市中央公民館日本語講座	木曜午前ボランティア日本語教室	なんなん日本語講座	芳川公民館日本語教室	中信にほんごひろば	中信にほんごひろば出前講座	松本市波田公民館日本語教室	松本日本語ファミリーの会日本語教室
開催場所	中央公民館	中央公民館	南部公民館	芳川公民館	庄内地区公民館	並柳団地集会所	波田公民館	松本赤十字乳児院内
開催日時	毎週火曜日 PM7:00~8:30	毎週木曜日 AM10:00~11:30	毎週月曜日 PM7:00~8:45	毎週木曜日 PM7:30~9:00	毎週日曜日 AM10:00~11:30	毎週日曜日 AM10:00~11:30	毎週土曜日 PM7:30~9:00	毎週火曜日 AM9:30~11:30
受講者数	41名(登録者数102名)	36名	13名	8名	20名		54名(登録者数)	-
ボランティアスタッフ数	23名	12名	8名	5名	30名		5名	-
主催	中央公民館	中央公民館	南部公民館	芳川公民館	中信にほんごひろば	中信にほんごひろば	波田公民館	松本日本語ファミリーの会
予算	市単独学級費	市単独学級費	10回分は南部公民館	地区費	参加料・各種助成金	参加料・各種助成金	市単独学級費	
講座運営に係る費用	謝礼 500円/回 教材購入費 (コピー使用料) 市営駐車場回数券	教材購入費 (コピー使用料) 市営駐車場回数券		教材購入費等	教材購入費 *教材資料コピーについては、庄内地区公民館に依頼	教材購入費 *教材資料コピーについては、庄内地区公民館に依頼	教材購入費 事業費補助	
受講料	無料	無料	無料	無料	1回100円(1家族)	1回100円(1家族)	無料	無料
講座の内容(方向性)	学習主体。 受講者のレベルに合わせ4つのクラスに分かれての学習。 年に数回交流イベントを開催。 ・スピーチの会(9月) ・食文化交流会(12月)	学習主体。 受講者のレベルにごとに指導、学習。 年に数回季節の行事に合わせ交流事業を開催。 ・七夕(7月) ・新年会(1月)	受講生の希望に合わせ、会話(身近な話題)、検定試験問題等学習。 自国の文化について紹介する交流会(随時)	学習主体。 受講者のレベルに合わせて個別に学習。 ・クリスマス会(12月)	学習主体 ・外国由来の子どもと、その親に対して日本語学習支援を行うもの。	学習主体 ・外国由来の子どもと、その親に対して日本語学習支援を行うもの。	学習主体。 受講者のレベルにごとに指導、学習。 年に数回交流事業を開催。 ・夏祭り参加(ブースを出店)(7月) ・文化祭参加(ブースを出展)(11月)	学習主体。 受講者のレベルにごとに指導、学習。 託児あり。

◇上記以外による日本語教室

教室の名称	開催場所	開催日時	主催	予算	その他運営に関わる費用	受講料(月額)
松本市ヤングにほんご教室	中央公民館	【昼コース】 毎週火・金曜日 AM9:30~PM12:30 【夜コース】 毎週月・木曜日 PM6:00~8:00	NPO法人中信多文化共生ネットワーク	県元気づくり支援金(H23~24)	コピー使用料ほか	【昼コース】 4,000円 【夜コース】 3,000円
講座の内容(方向性)						
学習主体。学齢期を過ぎた外国由来の子どもが、高校進学および卒業できるように日本語学習支援を行う。 就労を目指す若者を対象に、日本語の基礎を学ぶ。						

◇その他、日本語教室に関わる事業

事業の名称	開催場所	開催日時	主催等	予算	受講料	定員
金曜午後の日本語教室	中央公民館	H25.9.13~H26.3.14(全25回) ※詳細は別紙チラシのとおり	主催:特定非営利活動法人中信多文化共生ネットワーク、共催:松本市	文化庁委託事業	無料	15名
講座の内容(方向性)						
日本語学習を経験したことのない外国人を対象として、午後の時間帯で初級の日本語支援を行う。 これから日本語ボランティアの経験を浅い人を中心に、日本語支援の現場を経験することで、日本語指導に必要な知識を学び、講座終了後に日本語支援のスタッフとして自立を促す。 日本語支援を行っているボランティアにも見学をしてもらい、支援のスキルアップのきっかけとする。						



例年になく桜をはじめ花の開花がとても早く、街中が春の香り、彩りであふれています。

希望あふれる4月。元気に咲く花々のように、今年も多くの子供たちが元気に入りました。そうした中、日本語を母語としない子どもたちは希望に加え不安も抱えての新生活がスタート。子ども日本語支援センターでは、そんな子供たちが一日でも早く学校に適應し、友達と一緒に授業が受けられるよう、本年度も精いっぱい子どもたちをサポートしていきたいと思っています。

平成24年度 子ども日本語支援センターのあゆみ

～ 支援を通してわかったこと、感じたこと～

センターでは昨年度、市内15の小中学校で7か国（※）39人の子供たちを支援しました。日本語が全く話せない子どもたちだけでなく、日本語でのおしゃべりはできるけれど原級での授業理解が難しい子どもたち、日本語も母語も年齢相当に育っていない「ダブルリミテッド」の子どもたちなど、支援児童生徒のタイプは多岐に渡っています。

支援の形態は、原級授業からの「取り出し授業」。言語発達段階にあった手法と教材を用いて指導しています。これまではマンツーマン指導がメインでしたが、昨年度は支援人数の増加もあり、初めて「グループ指導」も試みました。グループの良さ、難しさなど、今後の支援活動に参考になる様々な示唆を与えられました。

多くの子どもたちを支援する中で、特に「体系だった日本語指導」の大切さを実感しています。日本語が全く分からないゼロスタートの子どもだけでなく、耳から入った日本語だけでなんとなく生活できてしまっている子どもたちにも、“日本語を順序立てて整理して教える”、そうすることで、読み書きの力もぐんとき、その力が必然的に“学力”へと結びついていくことがわかりました。当然のことながら、子どもたちの家庭環境、母国での教育歴、来日年齢・時期、そして原級での先生やお友達との関わりも日本語習得に大きな影響を与えていることは言うまでもありません。

これから日本で教育を受け、社会に羽ばたいていく子どもたち。生活日本語だけでなく、さらに学校の勉強が分かる日本語力をつけてあげることが不可欠です。日本語が少しわかるようになった子どもたちの多くは、友達と同じことをしたい、つまりクラスの授業がわかりたい気持ちがとても強くなります。「言葉がわかる→もっと知りたい気持ちになる→言葉でものを考えられる、つまり思考力がつく→心が成長する」。子どもの成長には、言葉の力がいかに大切か、言葉なくして全人教育はできないのではないかな…。日本語を学ぶ子どもたちを前にして、私達は日々そんなことを実感しています。



※7か国の内訳…ブラジル、中国、フィリピン、タイ、スリランカ、韓国、ネパール



支援の現場から

～「僕の頭は“まだら模様”。」 ～ある中学生の苦しみ～

「線分の両端からの距離が等しい線分上の点を、その線分の中点といいます。」

(中1 数学 「平面図形」の説明より)

ある中学生は、この文のたった一語わからなかったために、テストで点を落としてしまいました。彼は「線分」「中点」「等しい」など数学特有の学習用語は知っていたのに、日本人生徒なら当たり前前に知っていて読める「両端」がわからなかったのです。そして彼は、自身の勉強の理解度を図に描いて「ぼくの頭の中は、こんな風だ」と説明しました。(右図参照)。	日本語の文章↓	わからない言葉
	・・・(?)・・・(?)・・・。	
	「・・・。」・・・(?)・・・	
	・・・(?)・・・	
	・・・(?)・・・	

文中のおおよその言葉は知っている、もしくは聞いたことがあるが、その中にぽつぽつと知らない言葉がある。つまり、“まだら模様” のようだということです。

「教科書の文章を読んで何となくはわかるけれど、知らない言葉が出てくると、そこで躓き、勉強が進まない」「本人は勉強しているつもりなのに、それがテストの点に反映されない」。中学生になってその現実の厚い壁に苦しんでいる子どもたちの実体が見えてきました。

彼らは、日常会話にはほとんど問題なく、小学生まではあまり不自由なく学校生活を送っていたのですが、実はその日本語力が勉強を理解するまでには至っていませんでした。つまり「生活言語力」と「学習言語力」の根本的な違いが見過ごされてしまったわけです。「生活言語力」は、一般的には来日後1年ほどで習得できるといわれていますが、教科学習に必要な読み書き能力、つまり「学習言語力」の習得には5～7年かかるといわれています。小学校までは特に問題がなかったのに、中学校に上がったとたんに子どもたちが突き当たるこの現実の壁は非常に高く、乗り越えるのは容易ではありません。



日本語を母語としない中学生支援の課題

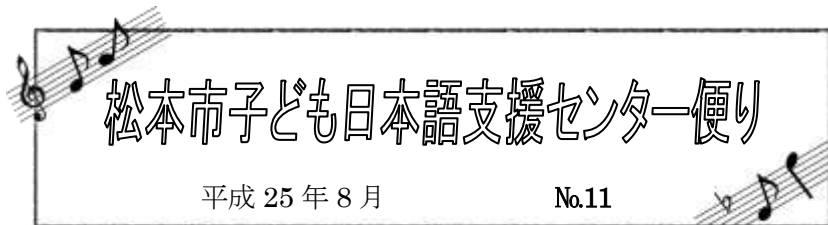


上記の例など、中学生の支援は課題が山積、私達も日々頭を抱えています。

言語習得の臨界期を過ぎて来日した中学生の場合、母国での教育環境で習得度合に差が出ます。勉強することの意義を理解し、母語での思考力がついている場合は生活日本語は比較的容易に習得できますが、その逆の環境で育ってきた生徒は、生活日本語もままならず苦労します。

生活日本語をクリアしても、中学生の場合、必然的に「高校入試」が次の目標となります。ところが、学習言語力を十分につけるだけの時間がありません。また、スライド式で時間割が動いているため、取り出しでの支援も容易ではありません。さらに、思春期ならではの精神的な難しさも。「日本語力が十分でない」「時間がない」「十分な支援ができない」など“ないない尽くし”・・・。

その困難さを「本人の能力」といって片付けてしまわず、私達支援する側も、寄り添い一緒に考えていきたいと思えます。

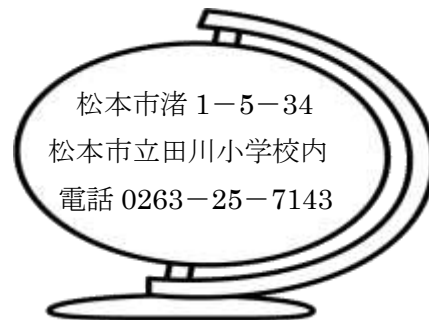


松本市子ども日本語支援センター便り

平成 25 年 8 月

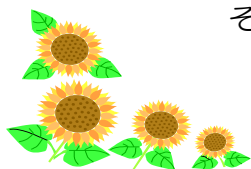
No.11

支援児童生徒数 35 人 (8 月 20 日現在)



松本市渚 1-5-34
松本市立田川小学校内
電話 0263-25-7143

セミの元気な鳴き声が、“猛暑”“酷暑”といわれる日本の夏を一層暑くする毎日が続いています。



そして、日本語を母語としない子どもたちにとっての夏休み。楽しい思い出ばかりでなく、休み帳に自由研究、工作、それに加えて日本語の勉強と、宿題がたくさんで最終日に泣きながら頑張った子どもたちも多いことでしょう。

8 月初旬の木曜日夕刻、松本市多文化共生プラザで開かれている「ヤング日本語教室」には、日本語学習や学校の宿題をするために子供たちが大勢集まっていました。夏休みの遊びたい盛りの時期に、ボランティアや大学生のお兄さんお姉さんたちと共に学習に取り組む姿に、彼らの真剣さ、必死さを感じました。

さあ、2 学期のスタートです。子どもたちにとって実り多い毎日となりますように。

日本の学校教育の仕組みを知ってほしい！

“保護者交流会” 開催

7 月 14 日 (日) 並柳団地集会所にて

「子どもたちはどんな学校生活を送っているの?」「学校生活に必要な費用はどれくらい?」7 月 14 日、市教育委員会との共催で、外国由来の子どもたちの保護者を対象にした「保護者交流会」を開催しました。今年は、市内でも外国人が多く住む並柳団地にある集会所で開催。団地周辺だけでなく、市内全域から 12 家族 16 人 (ブラジル、ペルー、中国、タイ) が参加し、日本の学校教育の仕組みや学校生活について話を聞きました。通訳を介して、市教育委員会指導主事の先生や日本語支援員と直接話す時間も設け、お互いに理解を深めました。

“知らないことがわかった喜び” は、大人も子供も同じ。そして私たち日本語支援員も、生の声を聞くことで外国から来た保護者の方の大変さを知ることができ、有意義な時間となりました。

地域の方々による大きな支え

今回の交流会は、毎週日曜日午前中に開いている子どもたちのための日本語教室「中信にほんごひろば」の会場を半分お借りして開催しました。この日本語教室は、日本語支援センターの母体である NPO 法人・中信多文化共生ネットワークが主催する“子どもたちが気軽に歩いて通える日本語教室”。NPO スタッフだけでなく、並柳団地の町会役員や民生委員の方々も全面的に協力してくださっているのが大きな特徴です。「地域の宝である子どもたちを国籍にかかわらず大切に育てたい」という温かい気持ちが子どもたちの大きな支えになっています。

交流会で大人が話を聞いている隣の部屋では、子どもたちが日本語学習に真剣に取り組んでいました。「学校の勉強が少しでもわかるようになりたい」と、仲間とともに勉強する子どもたち、そこに寄り添うボランティア、そして陰になりひなたになり子どもとスタッフを支える町会の方々。温かい空気が会場いっぱい広がっているのが印象的でした。



支援の現場から

「僕、こんなに話せて書けるようになったよ」

～ブラジルから来た少年の1年 少年の努力と周囲の寄り添い～

昨年4月、市内の小学校に入学したブラジル人のA君。日本語が全く話せないため、入学当初はクラスでも日本語教室でも心を開けず、授業中もウロウロしたり奇声を発してばかりでした。「どうしてみんな僕のが嫌いなんだ」とポルトガル語で話したAくんは、1学期の途中、家庭の事情で市内の別の小学校へ転校していきました。

新しい学校では、1対1で日本語支援員が向き合いました。まずは何でもいい、“声を出すこと”を目標に寄り添うこと2か月、ようやく言葉にはならないものの奇声ではなく“声”を発するようになりました。そのうちに友達の名前を口にできるようになり、9月、支援員が運動会を応援しに行ったことをきっかけに二人の間に信頼関係が築かれ、A君の学習意欲が次第に高まり始めました。

支援員は、A君が発した日本語をすかさずすくい上げ、日本語学習へとつなげる工夫をし、そして“寄り添う”ことに努めました。その結果「日本語がわかる→意欲が高まる→もっとわかる→原級の勉強も頑張りたい!」と正の連鎖となり、この夏、すべての授業を原級で受けることになり日本語教室を卒業しました。

支援開始当初、問題行動の多いA君を「この子は日本語以外にも何か別の問題も抱えているかもしれない」と誰もが思っていました。ところが、頑なに閉じていた気持ちがほどけ、そこに日本語が入ったことで、A君らしい素晴らしい成長を見せるようになったのです。支援員だけでなく、学校の先生と友達の関わりも非常に大きな助けとなり、原級に戻った今、担任の先生は「原級ではこれから、A君にもう一声かけるように心がけます」とおっしゃっています。周りの人々の“寄り添い”が成長を助けた好例です。



日本語指導の落とし穴！ 「流暢に話せても…」

フィリピンから転入してきた小学2年生のBさんは、日本に来て約半年。日本語の初期指導を受けながら、クラスの勉強も頑張っています。何事にも非常に意欲的で、クラスの授業でも手を挙げて発言するほど素晴らしい成長を見せています。

順調そのもので、一見、なんの問題もないように見えるBさんですが、ある日、短いお話を書かせたところ、助詞の脱落や誤用といった問題がいくつも見つかりました。先生や友達との会話では、日本人同士でも助詞は抜け落ちますし、間違いがあつたにしても周りが“察して”あげてしまうので、そのまま問題なくコミュニケーションができてしまいます。会話がなんとなく成立してしまった時点で「この子は日本語ができる!」と評価されてしまう……。それは時として落とし穴になることがあります。

日本人の子供なら、無意識のうちに「話し言葉と書き言葉」を使い分け、助詞（例えば、場所を示す「に」と「で」の使い分けなど）は自然習得できているので大きな問題にはなりません。しかし、日本語が母語ではない子にとっては、その理解が難しいのです。もし、これらの小さなミスが見過ごされてしまったら・・・“話は上手だけど、作文が書けない”アンバランスな日本語力にとどまってしまう、そして学年が上がるにつれ教科学習に躓いてしまう恐れも出てきてしまいます。

「こんなことぐらい…」と日本語母語話者が思うってしまう小さなミスも、第2言語として日本語を学んでいる子どもたちにとってはその陰に大きな問題がある場合が多いのです。こうした視点を持ちながらの日本語支援が大切で、私達支援員も日々、子どもたちの日本語力を観察しながら向き合っています。